MAINICHI
毎日新聞
12月18日（木）
2014年（平成26年）
発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051　電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

絵で地球の課題説明

NPOが「メッセージブック」

「笑顔の地球をつくろう」と呼びかけるメッセージブック「地球はメリーゴーラウンド」（PHP）＝写真＝がこの秋、刊行された。

気候変動や資源の減少、食料や水の問題など、いまの地球が直面している問題を絵と文で分かりやすく説明する。「自然エネルギーで電気をつくる」「野菜や果物を育てる」「みんなが住みやすい街をつくる」などの例を挙げながら「未来の地球を守るためにあなたにできることは？」とやさしく問いかける。

本は、NPO法人「メリープロジェクト」代表でアートディレクターの水谷孝次さん（63）が中心となって製作。水谷さんは1999年に同プロジェクトを始動させて以降、世界各地をめぐって人々の笑顔を撮影。子どもたちの写真をプリントした「笑顔の傘」を掲げてパレードをするなど、独自の活動を展開している。

「地球上の難問がすべて笑顔で解決するわけではない。けれども笑顔と農業、あるいは笑顔と（原発事故で被災した）福島などを組み合わせれば、より前向きに課題に取り組むことができる」と水谷さん。価格は972円。問い合わせは同プロジェクト（03・3478・1931）。

MAINICHI
毎日新聞
12月18日(木)
2014年(平成26年)
発行所：東京都千代田区一ツ橋1-1-1
〒100-8051 電話(03)3212-0321
毎日新聞東京本社

水源涵養 企業の手で

サントリー「天然水の森」活動

「くみ上げ量の倍」目標

清らかな水は、人や生き物たちの生命線。水をはぐくむ森林土壌の保護は、環境問題を解決していくための重要な課題の一つだ。商品の製造などで大量に水を使用する企業の側が、雨水を蓄えて水質を浄化する森林の「水源涵養機能」の保全に取り組む流れが出ている。【明珍美紀】

森林の土壌が健全な状態になると土壌のすき間に水を蓄える能力が高まり、水の浄化機能が向上するという＝山梨県北杜市の「サントリー天然水の森南アルプス」で、サントリーホールディングス提供

「水の希少性」を数値化

「水科学」をタイトルに掲げたフォーラムが先月、東京で開かれた。サントリーホールディングスが「天然水の森」と名付け、熊本県や山梨県など各地の森林で推進している「水源涵養活動」の研究発表会。サントリーグローバルイノベーションセンター・水科学研究所の矢野伸二郎研究員(31)は新たに開発した水利用評価手法について報告した。

食料や製品の生産から消費までのライフサイクルでの水の利用がもたらす環境影響評価の規格として、国際標準化機構(ISO)が今年8月に定めた「ISO14046 Water footprint（ウオーターフットプリント）」が挙げられる。ただし、「理念や枠組みは規定されていても具体的な評価手法は示されていない」ことから、水科学研究所では東京大学生産技術研究所の沖大幹研究室などとの共同研究で、場所や水源によって異なる「水の希少性」を数値化し、水資源への潜在的な影響を調べる手法を開発した。

「例えば、大瓶1本のビールを原料の大麦やホップから生産するには約200リットルの水が必要となる。だが、どこでどんな水が使われたかは数字には反映されていない」と矢野さん。「この手法を組み合わせれば、相対的に希少な水源の利用が、より環境に大きな影響をもたらすことが数値で理解できる」

「天然水の森」の事業は、林野庁の法人の森林制度を活用して2003年にスタートし、現在は全国17カ所（計約7600ヘクタール）に広がる。「これらの森林で実際に行われている水源涵養活動がもたらす効果も、ISOに対応した形で評価することが可能になる」という。

各地の天然水の森では土壌学や生態系などの専門家らが水源涵養活動に参加している。フォーラムでは、九州大学大学院工学研究院の島谷幸宏教授が、欧米で導入が進む「グリーンインフラ」について紹介。自然の機能を利用して森や川、水の管理、都市の基盤整備などを図っていくことで、「天然水の森の取り組みは国内のグリーンインフラの先進事例と言える」と話した。

サントリー・エコ戦略部チーフスペシャリストの山田健さん(55)は「工場でくみ上げている量以上の地下水を森ではぐくむという当初目標を達成したいまは、20年までに、くみ上げ量の2倍の地下水を森ではぐくむことを目指している」と言い、その涵養面積は1万2000ヘクタールに相当する。

水利用の評価手法について報告する矢野伸二郎研究員

「手ごろな店」に初の和食

ミシュラン東京版

今月、発売されたレストランの格付け本「ミシュランガイド東京2015」（日本ミシュランタイヤ発行）の「ビブグルマン」に、初めて「和食」（計200店）が登場した。

ビブグルマンは、星付きの店とは別枠で、「良質な料理を手ごろな価格で楽しめる店」を示す。本国のフランス版をはじめ海外でのガイドではおなじみの項目だ。東京エリアでは昨年からフランス、イタリア料理のビブグルマンを掲載するようになった。

「和食」には、日本料理やすし、そばなどのほか、ラーメン、洋食、居酒屋も含まれ、対象は幅広い。ちゃんこ鍋やどじょうは「ミシュランとしては初めてのカテゴリー」という。有機野菜を素材に用いる店なども含まれていた。

同ガイド総責任者のマイケル・エリスさんは「和食はユネスコの無形文化遺産に登録された。日本の伝統的な食文化は世界的に注目されている」と話していた。

「非戦の絵本」新装版刊行

新装版の絵本を手にする小原美由紀さん（左）と飯森和彦弁護士

「日本が進もうとしている道は自分が描く未来と同じなのか、自身の問題として考えてほしい。この絵本がそのきっかけになれば」と話すのは、市民有志によるネットワーク「りぼん・ぷろじぇくと」のメンバーで、金沢市在住の小原美由紀さん(49)。弁護士の飯森和彦さん(57)らネットワークの仲間と10年前に製作した絵本の新装版「新・戦争のつくりかた」（マガジンハウス、1080円）が刊行された。

「わたしたちは、未来をつくりだすことができます。戦争しない方法を、えらびとることも」。絵本の終わりで、ランドセルを背負った子どもたちのイラストの横に添えられる一文だ。

戦争への道筋を伝えたこの本が生まれた2004年は、有事関連法が成立した年。「不安を抱いた人々がメールで気持ちを伝え合い、議論を重ねて絵本の原案ができた」という。10年を経たいまは、憲法解釈の変更による集団的自衛権の行使容認が閣議決定され、特定秘密保護法が施行された。新装版には、この間の出来事や成立した法律など最新の情報を資料として補足している。

平和、人権への思いを継ごう

作家ら、土井氏しのび集会

土井たか子さんの思い出を語る内海愛子さん＝東京都千代田区の一ツ橋ホールで12日

平和や人権の問題に力を注ぎ、今年9月にこの世を去った元社民党党首の土井たか子さんの「思いを引き継ぐ集い」が12日、東京の一ツ橋ホールで開かれた。

作家の落合恵子さんや瀬戸内寂聴さんらが呼びかけ人となって企画された。憲法学者の永井憲一さんらが別れの言葉を述べた。恵泉女学園大名誉教授の内海愛子さんは、土井さんが設立を提唱し、代表理事を務めた「アジア人権基金」（2010年に解散）について触れた。「基金では賞を設け、（ミャンマーの）アウンサンスーチーさんを支える『無名の人々』にも贈られた。民主化のために闘っている人々の大きな励みになった」と振り返った。

女優の吉永小百合さんからは、白いバラと「二度と戦争への道を歩まぬよう 私達力を合わせて頑張ります」と記されたメッセージが届いた。

会場では、映画監督の呉徳洙さんの1987年の作品「ナウー・ウーマン・ドキュメント土井たか子」のダイジェスト版が上映され、はつらつとした姿がスクリーンによみがえった。

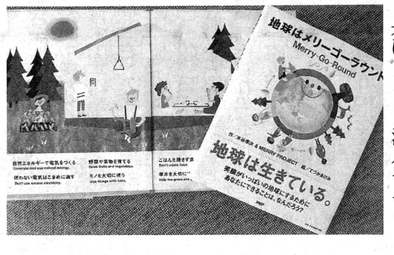
なお、この日に合わせて「ナウー・ウーマン」などを収録した2枚組みDVDが発売された。

絵で地球の課題説明

NPOが「メッセージブック」

「笑顔の地球をつくろう」と呼びかけるメッセージブック「地球はメリーゴーラウンド」（PHP）＝写真＝がこの秋、刊行された。

気候変動や資源の減少、食料や水の問題など、いまの地球が直面している問題を絵と文で分かりやすく説明する。「自然エネルギーで電気をつくる」「野菜や果物を育てる」「みんなが住みやすい街をつくる」などの例を挙げながら「未来の地球を守るためにあなたにできることは?」とやさしく問いかける。



本は、NPO法人「メリープロジェクト」代表でアートディレクターの水谷孝次さん(63)が中心となって製作。水谷さんは1999年に同プロジェクトを始動させて以降、世界各地をめぐって人々の笑顔を撮影。子どもたちの写真をプリントした「笑顔の傘」を掲げてパレードをするなど、独自の活動を展開している。

「地球上の難問がすべて笑顔で解決するわけではない。けれども笑顔と農業、あるいは笑顔と（原発事故で被災した）福島などを組み合わせれば、より前向きに課題に取り組むことができる」と水谷さん。価格は972円。問い合わせは同プロジェクト（03・3478・1931）。

ダム撤去運動の姿追う

米映画「ダムネーション」公開

ダムの存在意義を問いかけるマット・シュテッカーさん

「川の自由を取り戻そう」と、不要なダムの撤去に取り組む人々の姿を追った米映画「ダムネーション」が東京や横浜などで上映中だ。共同プロデューサーは、生態学者で水中写真家のマット・シュテッカーさん(39)。先月の公開にちなんで来日し、「ダムの建設によって川の生態系を破壊することが、持続可能な未来につながるのか。ダムの撤去という選択肢があることを知ってほしい」と訴えた。

シュテッカーさんは、フライフィッシングのガイドを経て野生の釣り場の修復、水中の生き物の撮影に情熱を注ぐようになった。老朽化したダムの撤去運動にも関わり、巨大ダムが川や自然に与える影響を問うため、アウトドア衣料メーカー「パタゴニア」の創始者、イボン・シュイナードさんと映画製作を企画した。

米国でダムがつくられた主な理由は水力発電、貯水、洪水防止などが挙げられるが、「技術が発達したいまは、風力や太陽光といった再生可能エネルギーで代替できるし、水資源の確保も、節水に努め水源を涵養するなど、もっと水効率のいい方法がある」。映画では、川を遡上するサーモンと、先住民の伝統文化の関係なども語られる。シュテッカーさん自身が撮影した水中のシーンが盛り込まれている。

市民上映会などの問い合わせは「ユナイテッドピープル」（092・407・9799）。

マイECO

マイECOの「マイ」は、「MY（私）」と「毎日新聞」の「毎」をかけたものです。「身近なエコを分かりやすく伝える」をコンセプトにしたフリーペーパーとウェブサイト（http://mainichi.jp/feature/ecology/）もこの紙面と同じロゴを使っています。